

皇國開闢由來記

一

^ 13
2750
1



伊13
9269
卷1-4

13
2750
1

13
2750
1-4

大日本國開闢由來記序

大靈寔宇一夢場也王公

士庶一夢場中之人也盛

衰興廢一夢境也笑傲悲

歎一夢境中之態也前夢

既覺後夢嗣發古往今來

均是以一夢場之人視息
一夢境之中真所謂大夢
者乎。一夢道人。比歲頻寤
凶禍或忽遇魑魅罔兩魂
褫氣懾或為雷火所擊搏
鎔愕昏顛又或忽大地震

裂身埋沒於黃泉下或乃
海沸河決漂蕩屋舍身葬
於魚腹中苦楚百端覺後
仍毛竦心悸惴惴然不安
猶在魘夢中每寢如此既
已有年憶是耄耄日至心

怯志摧。氣體凋瘁。上下之
氣。否塞。不交通之所致乎。
嗚呼。我既在一夢場中。則
夢此凶禍。其亦奚怪哉。雖
然。莊蒙有言。夢飲酒者。且
而哭泣。夢哭泣者。且而田

獵。方其夢也。不知夢也。且
有大覺。而後知此大夢。由
是占之。則凶夢即吉寤。妖
孽。即禎祥。亦未可知也。要
之。均是我與彼。同在一夢
場中。為一夢中之人。則其

所見所聞俱是一寤境中
之夢乎。今綴此編。喋喋焉
譚スルニ皇國寶祚之隆。土地
之秀。在四海萬國之上。則
外虜覬覦不足怖焉。亦是
得非大夢未覺。狂心未歇

而夢中譚夢者乎。若果如
莊蒙之言。則萬世之後。一
遇真人。興得忽然破夢。而
出則夢場夢境。與夢中之
人。一切雲消霧散。而日月
星辰。國土山川。神人萬物。



夢の世ふゆのそとを大夢
とす人の夢のまをい
て夢のまをいれよよと
人のまをいれよよと

夢の世ふゆのそとを大夢
とす人の夢のまをい
て夢のまをいれよよと
人のまをいれよよと

~~~~~

夢場中



松雨漁夫書



將與我合為一笑夫然後  
始可以知夢境中譚寤之  
大夢也耳時安政丙辰歲  
冬梢一夢道人自誌於一







饒速日能知天人際帥衆歸順

卷四 第六

開掖庭於檀原地八紘咸為宇

衢神預卜宮處御裳濯川流清

第七

景行西顧專殫力於驅除平定

小鬢刺賊表德於日本武尊辨

卷五 第八

示威施德邊裔青人草隨風靡

三嘆憫孀傾義靈耀反照暘谷

第九

留靈於神劍光耿炳於千歲後

八十綱誓不虛坤輿將歸皇化

卷六 第十

世道自逐氣運隨時轉變無住

異域教法為華後回護我神道

第十一

國家衛氣生隙外虜起覬覦心

八咫鏡放靈光神風覆沒敵船

○編末載胡元書牘二狀釋之

Decorative border with characters: 呂 可 和 女 為 女 宇 乃 由 延 伊 良 加 呂 留 可 連 利

Decorative border with characters: 美 女 武 乃 免 毛 比 伊 不 可 伊 反

Decorative border with characters: 乃 波 哈 下 比 伊 可 伊 不 可 伊 反













所合子  
 海神  
 天兒屋命

彦火出見尊妃海神之女豊玉姬命

住古小龍宮といひ琉球の國を  
 流求瑠球と云ふもの音相違  
 且琉球國の日向の南ありて海路  
 も遠く候此方とれは住集せ  
 のを豊玉姫ハ琉球國王の女  
 なること先人既にこれよりあり  
 せ玉玉の山住と波瀾羅龍宮と  
 のハ類する此不浪と云ハ本  
 文ハ海神の女とあり候はる



大伴佐伯西氏遠祖天押日命

讚天兒屋命  
 運大鈞而開元模  
 於奕世而贊聖謨

讚天押日命  
 雄志存君國一言千古仰  
 為將須死終不避龍龜  
 白環翁題

藤原氏鼻祖天兒屋命

天押日命昔曰海行波水濱屍山行波草生屍王乃上  
 皇去昔死未顧後為自種此一鳥開羅波死自





神日本磐余彦天皇  
後謚稱神武天皇

易稱。聰明睿哲。  
神武不殺。唯夫  
不殺。所以為  
神武欽。 崔駰謹讚

國德。以。正。人。  
志。不。足。以。  
以。十。之。五。也。  
另。有。一。也。也。

神武天皇之皇后車代主神女媛踏鞞五十鈴媛命



大伴氏遠祖日臣命  
賜名稱道臣命

能出其不意。斯可以立。  
偉効乎談笑之間。  
信乎兵家之機。以至  
易行乎至報。  
羊角題





氣長足姬尊

後謚稱神功皇后

譽田天皇

後謚稱應神天皇

於戲奮武。於乎撥  
文。抑亦翼贊之勳。

過路黃樵夫讚

兩きりり子  
仲いつりこみ  
あまのこ  
やほり  
あまのこ

武内宿禰



日本武尊之妃穗積氏忍山宿禰女身橋姬

身は海の  
波に消くも  
まきあてふ  
まきあてふ  
まきあてふ

克戡亂克遏  
劉於戲永世  
克休。

佩麟童子謹讚

小碓命後稱日本武尊

身橋媛將没海時詠歌  
胸刺相武能小野通燃火能  
火中通立武訪斯君波母



厩戸皇子

後諡稱聖德太子

雅料一

圓

好異之

法

乃藤子

歲

石執之

基

淡嶋漁史題

そはつゝ成るはくやあつるや  
うほ子をわくそ名よはれあつる

如意園



北條相模守平時宗

唯夫豪邁

英斷之氣

足以興士

志

信乎神風

蕩冠之感

足以破鬼

膽

蘿摩散入讚

北條相模守

時宗

の使を

対談子





















残て其土中より木理堅實してこれを往古の歴木の埋木と云ふと思はるるの城をりく堀得るといふ  
也。その地に御幸橋と呼なはところあれば三木の御木を詠り高泉の高田を詠するあやあんと  
柳川の武藤陳亮といふ人此中島廣足が歴木辨の序に記するその國は人ればいふ所の  
左もあつてと思はるるを我邦の土地豊沃なること異方に超るれば人少く田畠も多し  
ざる頃ふその膏腴う所の生氣がのづく地中に盈溢く世界希なる大木も多し生繁たつが  
人漸く衆くありて地氣を稟る物增多不従てかひく小橋のたすは殊更不斫せたりて残りの少  
くなりゆきつものろづ。さうして歴木の土地廣く住人も多しぬ筑紫の地なり。也。又  
景行天皇の御宇まへもあつて残て在りのなり。此れにも仁徳天皇の御宇に斬せたりといふ  
樹の影乃。且日か淡路島をかたむけ夕陽の高安山を越ると古事記に記するも其大歴木  
小劣らば肥前風土記に樟の大樹の朝日影不杵島郡の蒲川を蔽ひ暮の日影不養父郡  
の草積山を蔽ひつるといふ播磨風土記に明石驛駒手御井の楠は朝日か淡路嶋を蔭し  
夕日か大和島根をくいとひつるといふ近江國栗本郡の栗樹の圍五百尋ありてその影の朝日

丹波國ふさ。夕日か伊勢の國よさす也。偶その邊に住居せし農民の田畠にこの栗樹の蔭  
小覆つて成實さしつる。嘆申す伐せられしと今昔物語に記する。此歴木小劣ぬ  
樹の處ふありて明かり今の世も下野國如賀山の蔓延松といふ南三谷を越北七谷ふ  
蔓延つとれ幹の在り知のありといふ況深山幽谷人の到らぬありといふ。大樹乃  
今に存するものありぬ。いづれもその歴木と扶桑木なりといふ。實に僻言なること。先人も  
既これをいふものあり。扶桑木の殊勝て大なること。東方朔が十洲記に有。椹樹長者數千  
丈太二千餘圍。同根偶生。更相依倚。是以名扶桑。といふ。枝と枝と交り倚て延ぬ。は  
あて一樹のこゝろふ。椹樹多くありて且その最長きもの數千丈といふ。物のありる。漢  
主は我邦を扶桑國ともいふ。此の椹といふ桑といふ。さうして扶桑といふ。まさか  
桑樹のこゝろふ。淮南子にも日出于暘谷。浴于咸池。拂于扶桑。是謂晨明といふ。まう  
日と木と成合せん。日出く木中ふ在りて形容く東字を製し。日升く木上ふ在りて  
杲字を詩にも杲く出日と詠。反景桑榆の間を照る。残日の木下ふ在りて杲く杳の字



とせしが如き悉皆扶桑樹より字を製せしむを説文の段玉裁が説ふ所の如きこれ扶桑木の在り所筑紫の西邊あり殊小勝なる大樹ありしが故小漢土より遼小望見するの如き知るるる山海經小流沙三百里至于魚臯之山南望幼海東望博桑などいひ其他の賦あどい臨覽するを詠しむる如き此歴木の類ありていふなる大樹ありやありけん今いふてこれを知しむる如き十州記小數千丈とある數は三以上七以下といふ所従てこれを漢の世尺度めて算むる今三里あり餘ぬるかむ富嶽と西のり累なるやらの高さありはれは漢土よりいふるものなればこそ木小从ひ日小从て文字を製せしむる然る所の遼小瞻望することも明小知るものなるべし三十韻の首小東北字の位せしむるも不思議の神理あることありはれ左も右にも我邦國土の他小勝なるるこれられ事小据ても察し知る如きたりのありむや。

日本國開闢由來記首卷終

日本國開闢由來記

凡例

此書は我邦の大古國を開きしむる由來を世に弘く知しめんため小我邦の國史古典の中より專俗小通し易きやうを旨とししむ。抽出せしむるものなるとその名を假名日本紀ともしむるをせしむる。今の世ろ稗史小説の專善を勸惡を懲ことを説ふも加ふ夾画といふものを以し。あれ小依る先本文の意義を應養しむる。婦女總髮乃こまを讀み領解し易く。情小適悶を遣の便宜して頗戲場と看るに類似するものありしむ。人々に愛翫と今此書其體裁をも彼小倣く。その様を模たむるも此を正史傳記等の實事をそのまに記するの



なると。彼稗史小説の奇を説怪を譚く。人の意を動情を迎ふ如き。  
妄誕をのふと能く。讀者の厭倦を生じ易き。素より言ふやも  
あつて。己が身の生くる此日本國の世界萬國に勝る靈威ある國土  
なるをも知む。本報の心なきこと。神明の冥慮に背。天地乃條  
理。不戻ぬ。不祥より大なる。然のまら。此邦人の殊方  
と異なる。天稟自然性質に。所謂日本魂あることを知む。遂に  
任心のまら。作者の世に多有んことを慨す。古事記。日本紀をえりぬ。  
其他の諸書より参採。些も私の修飾を加ふ。山野の鄙夫。治繅の老嫗  
まぐり。通曉易さ。此書を著するのまを。その體裁の稗史  
小説に類似たるを以て。同觀ことなる。

日本

一  
道の天地自然の性は率ふ。其教を設る。各國その風土  
小由る差別あり。天竺などの風俗あり。頑愚なる國人を教化むと  
まら。瞿曇の如く。地獄極樂因果報應等の種々の方便を設く。  
此は淺導く。これその風土に相應する教誡なり。漢土の如き。民の  
心を本として。教を立てるところの國土を。假令天下の主なりとも。暴逆  
ありて。民の心を失ふ。之を代を放く。其位は代を道とを。於  
たり。故に孟子も。民為貴。社稷次之。君為輕といひ。土神穀神乃社  
壇なりとも。早魃洪水などの變頓ありて。おを禦捍。こを  
なると。其社壇を毀く。あれを更置。況て。そを小次と。その  
國君の民を治ること能く。暴逆ありて。民の心小違ふと。多かれ。



明君出で其位も代るも皆そは風土も應とく聖人の立ち。漢土の道なり。それらとひきつて格別みて我日本國の皇統を天津日嗣とのこと天上の高間が原に在るは所の天照大御神の御子孫ありて天つ日の御跡を嗣せさるゝとの稱なること古事記日本紀などよまの事とひひ續日本紀の歌も苗刺天照國の日は宮の聖の御子とひひ。我邦の昔の世人の普く知るることなり。萬葉集の長歌も天地の初の時久堅の天の河原も八百萬千萬神の神集々いしめて神分々一時天照日女の命と天雲の八重搔別く神下座奉し。など詠るも天照大御神の高天原を知りぬ。そは御孫瓊々藝の命よの地界へ降臨さすひたることを

いなるも。君を君として立たる國土あるが故も攝家清家の家々も皆天上より倍從來く事奉たる神人の裔孫あり。開闢の太古より君臣の名分定まら。動揺あたらしく。天皇の皇統も一系ありて擾亂たすは然の事なり。ど其皇子も源平等の姓を賜まら。一は臣下の列ありたまひしや。たらし皇子親王との念も再姓を除く皇位を継ぎまひたるよやなれ。靈異の尊位もまら。故も武烈天皇の如き御所行はるる殘忍なり。すくして孕婦の腹を割く。其胎を觀人の頭髮を抜く。樹も登らしめ。之を射墜たすふなどの大惡逆も崩御たまふまへの臣下に誰一人これと弑奉んといふものもなき。天皇と仰奉たるも君臣の名分一定て。妄に動揺し。風土の然らしむるも由るものなり。故も天下國家を治る補翼



とらるる聖教を採。その文字曲藉を今日の必用とする。漢土とも君臣の義を  
のふらるる相違あるを況く西戎墨夷などの例を以て論をきとみあはるる  
るなり。此篇の其降臨の確實なること。皇統の隆き天壤とも窮なき  
神勅の正證あることを普く世に告諭んが為に抄述するものなり。進雄命  
のよの地界へ降臨し多し。その七世の孫大國主命の此國土を瓊々藝命に  
讓奉たることより。神劍八咫鏡の國家を衛護する。靈驗の炳然たる  
ことを記し。胡元の軍艦を西海の浪に覆没し。十萬の軍兵を塵みせし  
事に筆を闕く。天地の剖判より。磐戸隱などの幽玄して倉卒に領會し  
がくは事どもいへば。省て載ざるなり。

我日本國の地。殊に異域に優たる所。以て北極地を出るものと三十度より

四十度の間は。正帯の處に在る。寒暑其中を得。地は南北に陟。東西に  
跨る。四方に海を環す。土地膏腴。五穀豐饒あり。草木繁茂。果實よく  
熟成。金銀銅鐵鉛錫の類。すべし國土に生ず。一切缺乏なる物あることなく。  
殊に世界最第一たる粳米を。六十六州の間。産する地なく。志も刀劍乃  
鋭利なるものと。全世界中。比類なく。近海に品石多し。大船を寄  
るに便宜あり。且人民衆多。他國に數倍す。天賦の良質あるを以て。  
清潔を好。神を崇。義を重。とる。此土に生ずる人。自然  
より出づるも。淳樸質實ありて。勇氣あるがゆゑ。大古にこれ人乃道と  
いふことも。忠義孝貞などの名目も。なれど。其行事の道。違ふもの  
少く。大伴氏の遠祖天押日命の誓に。海行ハ水付屍となり。山由らん



草生屍となつて。どりをさむる者なくとも。厭す。大君のうゝ死。顧  
とせ。とのひ。筑紫の防人として。東より賦役。おさまで。ゆく。土兵。額  
箭。わたるとも。背。おる。箭。の。負。だ。進。あ。あ。ありとも。退。と。せ。ぬ。とのひ  
おとく。君臣の義。父子の親。も。か。の。づ。う。具。た。り。人。漸。多。く。な。る。に。従。て。  
教法。な。く。て。治。ぐ。ら。に。由。る。小。應。神。天。皇。の。御。世。に。漢。土。聖。人。の。書。の。我  
邦。の。風。土。に。相。應。を。な。す。と。知。し。め。て。あ。ま。と。三。韓。よ。り。傳。た。ま。ひ。  
人。々。に。教。ふ。天。下。國。家。を。治。ふ。輔。翼。と。為。た。ま。ひ。より。儒。道。に。此。邦。に。弘。ま。り。て。  
其。道。今。よ。至。く。盛。り。も。ご。も。昇。平。年。久。く。士。民。游。墮。に。馴。風。俗。淳。華。に  
靡。博。覽。詩。文。を。學。問。の。專。務。と。か。り。お。や。う。な。り。ぬ。れ。う。これ。を。以。て。禮。義  
廉。耻。の。四。維。を。張。な。し。志。を。發。起。ん。り。の。とも。顧。慮。を。大。に。儒。道。の。本。意。を

失。は。く。な。れ。ども。此。土。に。生。を。受。ち。る。人。の。身。に。具。有。た。る。天。稟。の。良。性。を  
決。して。匹。ぎ。る。が。ゆ。ゑ。今。も。あ。ま。と。文。武。の。大。道。を。り。つ。く。あ。ま。を。激。厲。と。れ  
お。い。必。發。現。出。く。故。に。復。ん。と。の。譬。は。三。冬。の。嚴。寒。に。水。氷。土。潤。と。ぬ。み。樹。木  
の。葉。に。盡。く。落。く。枯。槁。た。る。が。如。く。草。莖。を。朽。と。く。存。ま。ぬ。か。ま。が。如。く  
な。る。も。其。枝。幹。を。く。い。根。茎。も。花。實。と。な。り。莖。葉。と。あ。る。べ。き。質。に。盡。く  
含。有。た。る。が。如。く。な。る。こと。の。野。人。鄙。夫。の。目。丁。ご。み。知。さ。る。輩。郷。丁。傭。夫。の  
徒。も。ど。ろ。く。俠。腸。義。氣。が。あ。り。て。事。に。臨。ん。だ。敢。て。死。を。顧。ま。ら。ぬ。者。の。あ。ら。ふ。て。も  
知。ら。ま。た。り。故。に。今。こ。の。日。本。龜。の。義。氣。ご。み。現。出。と。ぬ。み。我。一。を。以。て  
異。方。の。百。千。人。に。抵。當。し。足。ら。ぬ。國。土。の。肥。饒。な。る。よ。と。い。地。中。海。亞。墨  
利。加。な。ど。の。地。も。た。倍。に。倍。と。な。く。況。て。北。邊。鄂。羅。斯。等。の。不。毛







より起るとあり。論も足ぬものとぞめなり。

太古の年数ハ弘仁曆運記ハ載るるも。皆荒唐説あると。後人  
妄ニ採る。たゞと日本紀神武天皇紀ハ纂入たるなり。或人の  
然るも。暫其説ハ從テ。一百七十九萬の六字ヲ省るる。さ  
その年數ハ氣運の旺賤と變革あるハ至テ。卒爾ハ解説されど多く。  
此書ハ唯々を婦女總髻の看得らるべきやうに。記たるりの。第  
十回ハ畧その一端をいざるの。審悉ある。天日嗣辨ハ記載する。ハ  
此ハ其の省るなり。

舍人助岩垣松苗ハ國史畧ニ。松永貞徳ハ載恩記の説を載テ曰。豊臣  
太閤嘗テ朝服を闕下の施藥院ハ著一と。數天顔を拜する。

感激。人ハ謂テ曰。微賤身より起テ人臣の位を極ふ。天恩實ハ深シ。蓋  
吾母昔朝家式微たす。一時當テ後宮ハ仕へ。一賤役を奉。一日不  
圖龍躰ハ近づきた。て有身。その。出テ尾張の人ハ嫁。吾を生たる。  
と。松苗按ハ豊太閤ハ我邦古今無双の大英雄。其行事の確。落  
と。日月の皎然。如く。曖昧。托言。自貴種。稱。女。口。  
卑劣心。人。故。此戴恩記。断テ實言。と。世。豊  
太閤の嘗テ吾母日輪の懐。入。夢。吾を生たる。傳。隱然  
ハ。皇。實。それ。朝。憚。み。  
國家ハの禮義を思。施藥院の一語。偶感激喜悅の餘。出。  
かり。其實。泄。抑。大政所の日輪の夢。托。言。あり。







「字の書と藏さるる」とあり。何不<sup>レ</sup>分て世<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>ることなれば之<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>者も多有<sup>レ</sup>ざらうとせ。この頃の先達<sup>レ</sup>これを<sup>レ</sup>比<sup>レ</sup>較<sup>レ</sup>辛<sup>レ</sup>苦<sup>レ</sup>とて漸<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>讀<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>たるものを採<sup>レ</sup>り。これを<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>録<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>額<sup>レ</sup>縁<sup>レ</sup>かゝり<sup>レ</sup>び大<sup>レ</sup>樞<sup>レ</sup>木<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>圖<sup>レ</sup>說<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ざれば我<sup>レ</sup>邦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>淳<sup>レ</sup>樸<sup>レ</sup>質<sup>レ</sup>直<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>太<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>易<sup>レ</sup>簡<sup>レ</sup>かゝり<sup>レ</sup>て煩<sup>レ</sup>きことなき世<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>強<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>ることな<sup>レ</sup>りて足<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>漸<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>蕃<sup>レ</sup>殖<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>彌<sup>レ</sup>重<sup>レ</sup>查<sup>レ</sup>なりしより<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>典<sup>レ</sup>籍<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>始<sup>レ</sup>なりし<sup>レ</sup>一切<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>異<sup>レ</sup>域<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>採<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>ること<sup>レ</sup>みな<sup>レ</sup>りし<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>悉<sup>レ</sup>皆<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>幽<sup>レ</sup>筭<sup>レ</sup>たる<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>にして<sup>レ</sup>却<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>邦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>寰<sup>レ</sup>宇<sup>レ</sup>の中<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>萬<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>傑<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>貴<sup>レ</sup>ことと<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>ると<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>前<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>既<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>魂<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>確<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>私<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>惡<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>異<sup>レ</sup>域<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>善<sup>レ</sup>ことと<sup>レ</sup>採<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>邦<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>せん<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>強<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>漢<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>戎<sup>レ</sup>との<sup>レ</sup>差<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>論<sup>レ</sup>ぶ<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>皇<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>遺<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>體<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>合<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>もの<sup>レ</sup>とい<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>已<sup>レ</sup>が

好<sup>レ</sup>惡<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ころ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>辟<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>聞<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>慾<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>覆<sup>レ</sup>昧<sup>レ</sup>され<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>捨<sup>レ</sup>その<sup>レ</sup>宜<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>ざる<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>害<sup>レ</sup>とな<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>淺<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>惣<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>私<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>公平<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>遠<sup>レ</sup>慮<sup>レ</sup>ぶ<sup>レ</sup>こと<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>邦<sup>レ</sup>衣<sup>レ</sup>服<sup>レ</sup>器<sup>レ</sup>械<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>制<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>甲<sup>レ</sup>冑<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>器<sup>レ</sup>等<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>形<sup>レ</sup>狀<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>鉞<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>捷<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>劍<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>圖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>採<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>その<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>する<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>典<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>糸<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>ぶ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>予<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>識<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>吉<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>翁<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>說<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>東<sup>レ</sup>より<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>ると<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>實<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>轉<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>草<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>蔓<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>纏<sup>レ</sup>絡<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>翼<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>腸<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>廻<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>弓<sup>レ</sup>射<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>放<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>運<sup>レ</sup>ぶ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>あれ<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>神<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>太<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>衽<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>左<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>自然<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>漢<sup>レ</sup>土<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ひと<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>衽<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>卑<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>誇<sup>レ</sup>衿<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>佳<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>保<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>ざる<sup>レ</sup>邦<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>語<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>己<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>真<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup>專<sup>レ</sup>



彼小倣んとまらるゝいとも悔恨をこぼせありたるといをれり。此翁の繪事小殊小巧ありて。我邦の學小深く意を注ぎ太古の衣服器械などをも其名を由りその實を覓檢費く畫出さるとなること。採用すべきことらばせよ小據らることをも多く又畫工國芳の創意より出たることも多有どりと。是婦女童幼の之を看んて小。それ厭倦を放遣させ睡眠を催起せんとを欲く。爽加るといふを盡く太古乃真形なりと思ふことあり。讀者よく此義を領會せよ。

安政三丙辰歳春二月

一夢道人指漏漁者誌



日本國開闢由來記卷一

明治四十四年二月廿二日  
唐津本三郎氏寄贈

指漏漁者編

第一 藪雲の神劍世間不出現し國家の護となる

大少の二神天下を經營て鴻業の基を建

進雄命ハ天上の高天原より出雲の國に簸の川上へ降臨たまひ其地を領したる者の名を脚摩乳といひ妻の名を手摩乳といふ。此者れ為る。越の國に八岐大蛇と字號りのを斬り其害を除くまひし。是れ天に藪雲の劍。まこの名に草薙の劍といふを得たまひ。是れ神劍なり。吾私のものとして安んずるのよあはれ。天の神の御許に獻くまひし。後脚摩乳の女奇稻田姫を妃として俱に住たまふ所を



覓もとまひて。出雲いづもの國くには清地すがといふところふ到いたり。其地そのちの風光かぜと眺望ひがめと  
すひく。吾われ此地このちに到いたり。心清こころすがくくなりぬ。こま吾宮居わがみやゐと建て住すむ  
地ちなるべしと託たくす。其地そのちに宮處みやゐと營造つくりせし。此御詞このみことことばより  
く。其地そのちの名なを清すがとよびし。後のちより須賀すかといふなり。その宮殿みやゐを  
修造つくせし。まふ時ときふ。詠よまひし。御歌みか。  
彌雲やうんたつ。出雲いづも彌重垣やへちかはまふ。彌重垣やへちか造る。それやへがまはた。  
此御歌このみかも。御妃みきさき奇稻田くいな姫ひめと棲すまり。たまりんが為ため。よ。おれ八重やへがたの  
宮居みやゐと造つくせし。まふとといふ意いを詠よまふ。ところみく。今いまの世よま  
も人のれ。並なく詠よまふ。三十一文字さんじゅういちぶつじの歌うた乃すなはち最初さいしょみく。句意くご  
絶妙ぜつめつなり。ところは神詠かみよなり。おの御歌みかの意いを略りやくし。釋しやくば。八重やへ

垣かきのや。彌やの義ぎふく。いやがうへは重疊じゅうたうたる雲うんといふことにて。おの  
雲うんふ。青雲あせうん白雲はくうんの差別さべつあり。白雲はくうんと。降ふる雨あめと。ところは平常つねは  
視みるところの雲うんといひ。青雲あせうんと。大虚おほぞらの中なかに充満ちゅうまんく。重疊じゅうたうたる  
氣きの。仰あがむ。まはた視みる。蒼々そうそうと。く。精微しやうゐの氣きよ。天地てんち萬  
物ぶつも。唯ただこれ氣きを以もつて繫維けいゐ保持たいうするのみ。て。天上てんじやうよりこの氣きを  
以もつて壓覆あひおほひ。人もなふも。悉しやく皆みな此氣このきの中なかに住居すまひし。おれ氣きを  
呼吸こくわいして。生命いのちを保たもつ。自己おのれが身みの此氣このきの中なかにあることを知し  
ぶること。猶魚なほうをの水みづ中なかに。水みづを知しぶるごとく。近ちかく。眼めも  
遮さら。高たかく仰視あがみし。青あせく視みゆる。故ゆゑに白雲はくうんと對たいて。あまを  
青雲あせうんといひ。まはた彌重やへちか棚たな雲うんとも。棚たなと。横よこに靄もやく。いづくも





卷

三



進雄命  
天叢雲の  
劍を得て  
天津神に  
獻んと  
志す處



粟て。棚のぶくちをたるせいの名あり。五百重雲といふも。その重粟  
あるよりいふ名あり。天孫降臨の段小稜威道別小道別く天降と  
まふといふも。その棚雲ハ幾重ともなく重粟てなるがゆゑ小稜威  
の力と以て別ち。道あるとて道をつけたることをいふあり。その  
八雲起といふを發語あり。出雲といふ。出雲といふ。出て立昇る雲といふ  
あといふを其出雲を兼く。彌重垣といふは宮居の牆を幾重も  
建營く。嚴密小固守せしめし御意あり。出雲といふ國の名も。此  
御歌をも起する。その地を出雲といひしより。八雲起と詠する  
ゆゑもいふべし。はやくとて。嬌を隠せ置んが為ぬ。その八重  
垣の造りごと。辭を重てのこまふとて。奇稻田姫を愛したる。

御意の深長ことを含有く詠せたまひしるなり。其。吾彌重垣  
と造んとせしむ。此宮の為小雲も彌重垣と造よと。唯雲のうを  
のこむとて。釋もあはるべし。  
是れも其足摩乳。汝の我宮の首とあれと。これ須賀の宮に事な  
仕せしむし。その奇稻田姫の生さすしとて。その神と。八島七奴美神と  
の。八島七奴美神ハ大山津見の神ハ女名ハ木花知流姫と娶く。御子布波能母  
遲久奴須奴神を生たまふ。此神游迦美の神の女名ハ日河姫と娶て。御子深淵  
の水夜禮花カ神を生さす。此神天之都度閑知泥の神ハ女名を娶て。御子淤美豆  
奴カ神を生たまふ。此神布怒豆奴カ神の女名ハ布帝耳カ神と娶て。御子天之  
冬衣の神を生たまふ。此神刺國大神の女名ハ刺國若姫と娶て。大國王の神と



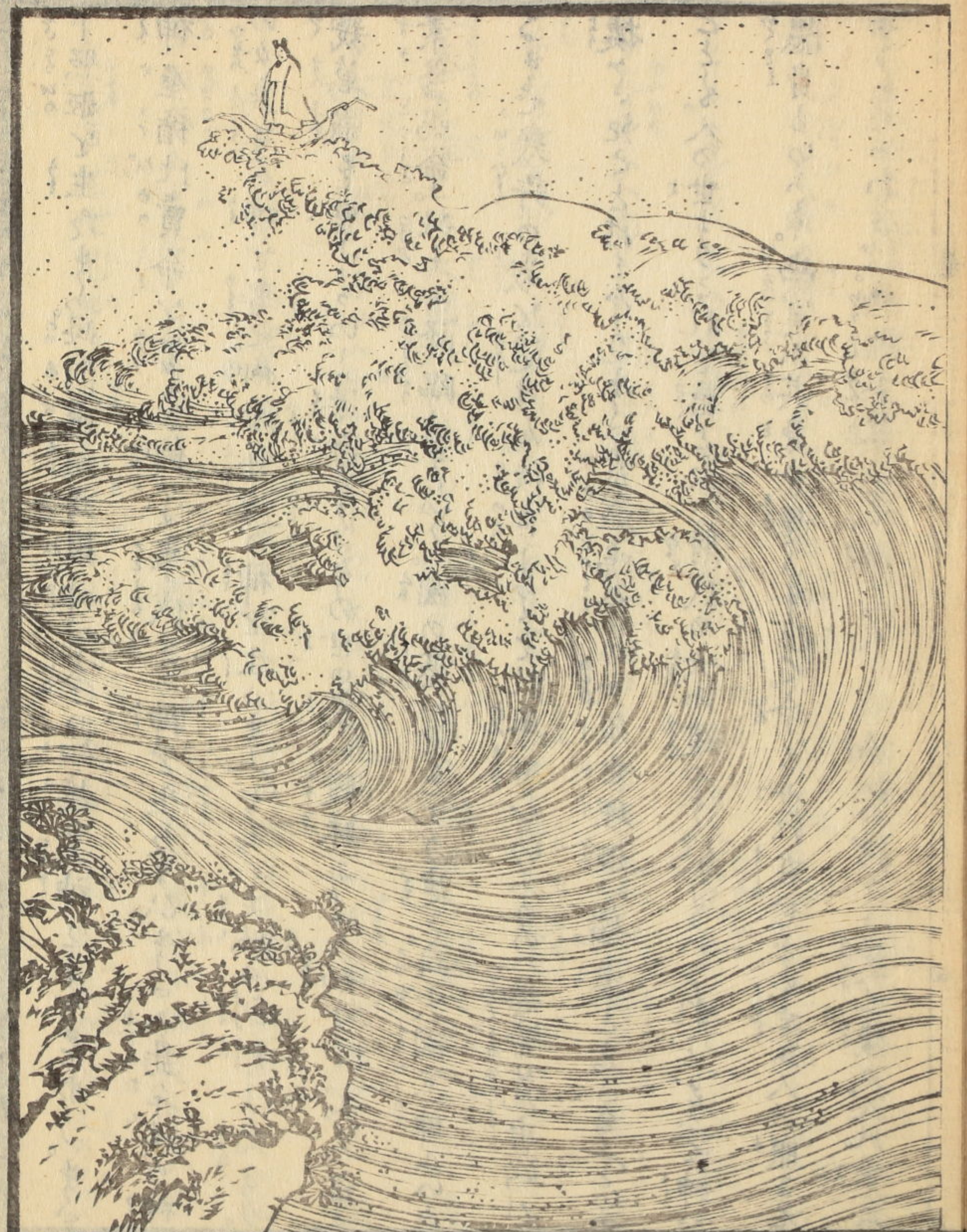
生たまふ。此大國主の神ハ素盞鳴の命ハ七世の孫なり。大國主の神ハ五の名  
あり。大元牟遲の神とも。葦原色許男神とも。八千矛の神とも。宇都志國主ハ  
神ともまじり。其の大國主の神ハ兄弟八十神あり。此兄弟とのハ父と同一  
なる兄弟ハあり。其遠祖より此親屬あり。今ハ從兄弟再從兄弟。三從  
兄弟なり。此の指ていふものといへり。然ども皆大國主の神ハ國を避て  
從奉り。唯この大國主ハ神の。此豊葦原の瑞穗の國ハ。後ハ大倭の國  
とも大日本國ともいふ地を領したまひ。素盞鳴命の女。須世理毘賣と嫡  
妻とす。まじり。出雲の國ハ出雲郡宇迦志郷の西あり。後ハ鰐淵山といふ  
地の山本小宮居したまひ。此大國主の神ハ胸形の奥宮小住したまひ。一  
神の女。多紀理毘賣と娶。阿遲鉏高彦根の神と。妹高毘賣命又の名ハ

下照姫を生たまふ。此阿遲鉏彦根神也。今ハ加茂の大神とまじり。まじり。  
神屋楯比賣命と娶。御子事代主の神を生たまひ。まじり。八島牟遲の神  
の女鳥耳の神と娶。御子鳥海の神と生たまひ。まじり。天地の割判。始より。  
幾萬歳を歴し。いと浩邈なるこの世の事ハ曖昧あり。知し。たの孫と。  
素盞鳴命。此土に降臨したまひ。國の基ハとまじり。建。此大國主神ハ  
るまじり。幾許の歳を過けん。後世より。まじり。年歴といふもの。悉皆荒唐に  
據り。たことなきなり。まじり。素盞鳴命の女須世理姫と嫡妻とまじり。まじり。  
こと。人の世よりこれを聽たれ。時代の大小違やうにわらわれ。まじり。神ハ  
隱身といふ。幽冥ハ其身を隠し。今も世に在せども。まじり。人ハ眼を  
あつり。あつり。幽頭ハ界とを神と人との隔かのほり。定て後の人ハ世と



少名彦命  
波の秀小  
發現  
たまふ所

卷一





大小異あることありまば。それ年数の事及こまらばこれ至ても。決り臆測を以  
て論ずべきことありあべとねりし下。さて此大國主の神への豊葦原の中  
つ國を經營造固んとて。出雲の國に島根郡の美保岬に到坐し時、海の  
上の人呼が如き聲の聽き驚て之を覓まひしりども。都てこれぞといふ  
物もんえさきし。頃時あやて甚小き神の浪は穂より蘿摩殺と船とて  
乘鷓鴣の羽を衣とて服海湖に從り歸來するものあり。大國主神の  
小され神を怪とおや。之を掌の上お置り。翫まひし。忽跳り其類は  
齧はきこり。その神の名を問たもんども。答もえせざる。所從の神不  
問すもんども皆知すと白すゆゑ。久延昆古を召り問たもひし。此  
此の産巢日神の御子少昆古那の神ありと白すゆゑ。神産巢日御祖命

小白より。く實ふ此の吾指間より。滴墮しあり。よく愛養て汝葦原の白許  
男命と兄弟となり。其國を作堅よと答告す。ひし。爾より此少昆  
古那の神と相並り。天下を經營り。田疇と畫り。賦役と拘り。凡て百姓を  
安輯し。事と爲り。國土を作堅た。青人草及牛馬雜犬などの爲り。  
其病を療す方と定め。野鳥狐狸の怪。蝗蝻の田畠を損ひ。稲苗を  
傷つれ害と攘ん。其禁厭の法を定め。我豊葦原の瑞穂國に。  
五穀豊饒し。穀味の美きこと。世界無比類。膏沃の良地なれば。其土  
地不生出。米穀菜蔬と喫ふ人。魚鳥の肉すら。多く喫て。身體の摂養不  
妨害あり。況て獸肉の神明の禁た。唐土の例をりて。  
それと律ぶきことあり。故は天武天皇の御世に。天下勅し。



牛馬犬猿雞の肉を食ことと制すまひ。孝謙天皇の御世あり。猪鹿の類は  
すでども嚴く禁たすまひ。他邦に異ある國土の秀靈ふれば、故に  
神も六畜の病を療まき方までども設すまひ。ことゆゑに此邦に生ぜ  
受たつりの牛、牛の肉を猪鹿の肉かふび晨と司り時と告る雞の肉を  
も戒る喫べくは。おまを國土の恩をおりひ。神明の誠と奉る所以され  
ばあり。さて大己貴命。いづとに少彦名の命ふ吾等が造ところは國善成  
就なりと謂んるとのさまひ。少彦名の神は速その功績は自誇さまひ。意  
の發すまひ。と察すまひ。されば今天下を經營たりとも。四方の隅までも遺  
るく徳化の行けりたるといふも。いづとに善成なりといひ。いづとに何處か  
其心と挫くまひ。その得意の念を抑たまひ。いづとに伯耆の國は相見郡

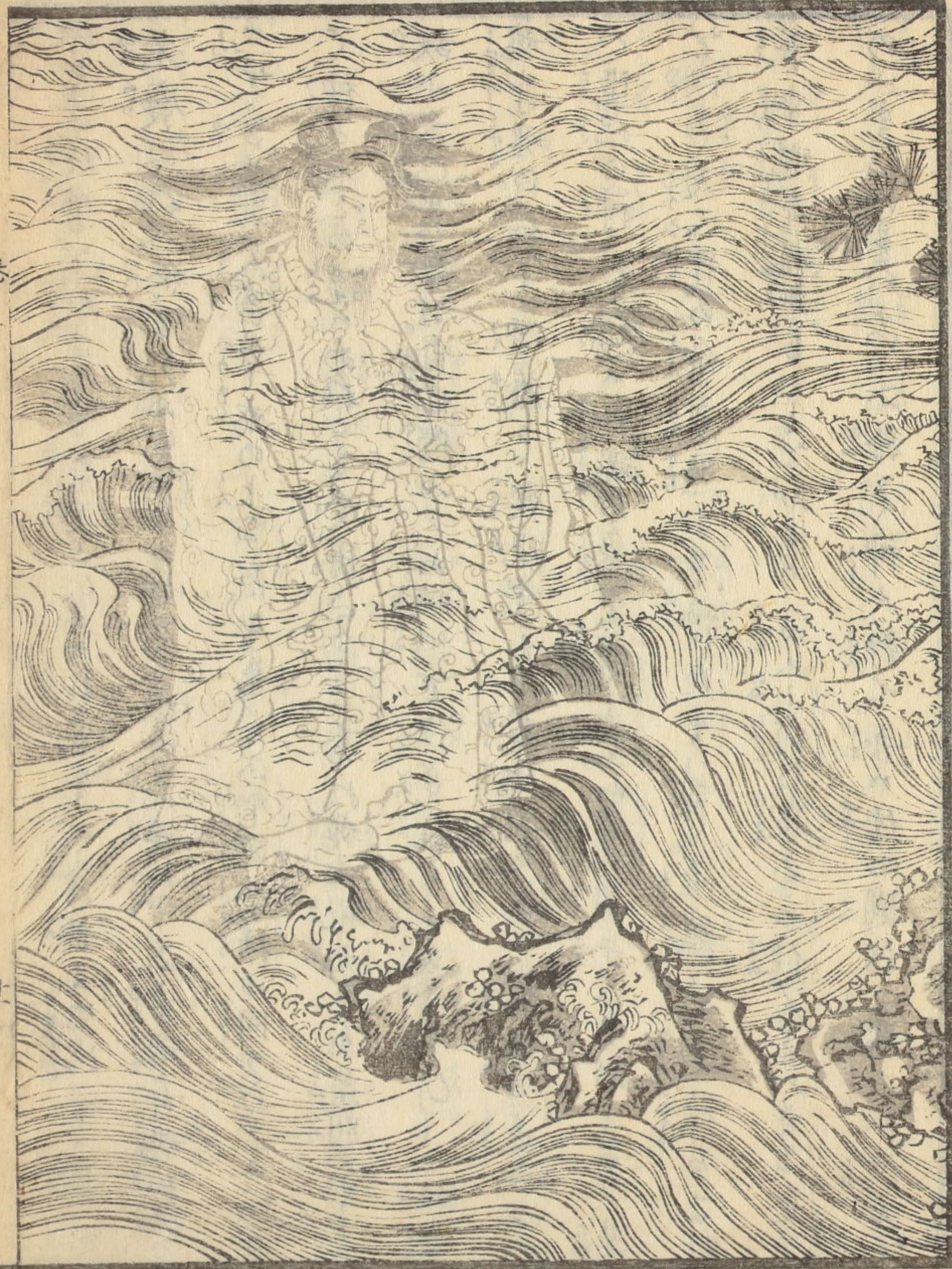
の西北ある島に到り。粟の莖實たす。その粟の莖は縁さす。ことさるが  
馳く莖は彈かれて。常世の國より渡すまひ。常世の國といふ何處か。われ  
遠く海を渡り。往く國といふ。皇國の外に萬國皆常世の國あり。此少彦名の神は  
御祖神産巢日の神は指間より漏去たまひ。神ふてその行方も知さまひ。  
趣あるは遠く外國へ行たまひ。故なり。その海より依來さまひ。外國より渡來た  
す。常世の國に渡すまひ。外國へ歸たまひ。神功皇后の賜を奉り  
太子と壽たまひ。御歌あり。酒の神常世に座。若立す。少御神のと詠さまひ。とこれ  
は。後まをも外國の鎮座。このひあり。ま。粟莖は彈かれて。常世の國に渡すまひ。  
といふも。少彦名の神の身体の渺小あること。知さまひ。かく少彦名の神  
の常世の國に去るまひ。いづとに。大己貴命。大己愁さまひ。獨國中の



いまだ成さるるところを經歷して遂に出雲の國に到る。其れ葦原の中つ國  
りより荒芒なるのまぢりび村と云ふ私の君長ありて頗強暴相聽從さ  
るものも多かりし。吾已に摧伏し和順さるものもたれども僻境にいづるは徳化  
の普く届き所なれどもわづぬと吾一身のまてあれは輔さるものなきをいふ  
せんやとのさきひつゝあまのついで踏踏てゆく時ふ忽神光の海を照て浪乃  
上り浮出さるのついで。大己貴命より吾在す汝のあまの能此國を平けし  
や。吾在ふよりとそかくも大造一功績を建つるまに成得るまをいふなり  
知むやといひたるふ大己貴命の駭疑く左の汝は是誰ぞやと問たすひされば  
神人對て吾はと汝が幸魂奇魂ありといふ。此幸魂奇魂といふは識神の上は  
具して徳用といふるところに名あり。此幸魂奇魂と合て和魂といふ幸魂といふ

身不受得たる識量の優劣の徒に萬理を記得衆務を總宰て一切の事  
物に應答す。受得たる幸福を全ふするのあり。人々を一身に  
爲ども神の氣を以て躰となす故に祭祀奉る社毎に御魂を裂く  
在るとを以てやう裂魂の義あり。やう一切の事業より萬事と識神の  
中み藏外より來る物に應じくをきくは判別して僻錯ことある不思  
議の妙用あるを以て。その靈異と云ふは徳用と云ふは奇魂といひこの両の  
徳用と和合融通たるを和魂といふ。此幸魂奇魂は人々のめとより鳥  
獸虫魚一切の物にそれくは受具る生を保有。荒魂といふ荒は荒  
暴の意されども。とはあらわれの詞は生をあまの訓鹿麿とあまの  
訓廢をわれと訓義ありて。荒魂といふ生を出たるまに魂をて壁言は玉の





卷

十



大名  
持命  
奇魂  
問答  
の處



いほふ 琢磨ミソミを加ふるくまへと荒玉あつたまとのみか如くごと。その人の世よは生なま出いる身みも。  
老廢おろちぬれば終つひは死しのゆるが如くごと。おは荒魂あつたまの中うちに幸魂さいたま奇魂きたま和魂わたまの  
三さんと含藏あやまて人畜にちく草木さうもくの上うへにある。そましくい生なま死し榮枯えいこの同おなくらざるけり  
て。神かみと人ひととの違ちがひあれども受得うけえるととら此魂こゝろの根元ねもともち差別さべつありし。  
故ゆゑに大己貴命おほみむちのみことの自己おのれ獨ひとりあらむに此国こゝろをつ作つく竟つひ難がたしと憂うれひあらしむに此幸このさい  
魂たま奇魂きたまの志こころづく潛藏くづかるに發現あやすにたら荒魂あつたまはあらず和魂わたまの之これきなれ  
ば造化さうぞうの神かみは別べつは和魂わたまの象さうを現あはれしにかくの教示しんじゆさまひあらしむに是これ  
を以もつて大己貴おほみむちの命のみこと忽然と了しまりし悟さとたまひくに唯然ただとし。迺なほ汝なをこれ  
吾われ幸魂さいたま奇魂きたまをしるにことを知しるに汝な今いま何なにの處ところにあらしむに住すむにといはるるにと  
のこまひけるるにおのれに於おける神人かみ對たいて。吾われ倭やまとの國くには三諸山さんしよさんお住すむに

欲ほとあらしむに。故ゆゑに宮みやを彼處かゝにあらしむに就居すましむに。おと三輪さんりんの御神みかみあり。  
その教しんの隨まふ齋祠さいだたまひくに。和魂わたま満足まんじつて洪福こうふくを得えて天下あまを普あま  
く經營いんぎやう竟つひさまひあらしむに。この幸魂さいたま奇魂きたまの發現あやすに論ろんたまひくに。成なるに。  
大己貴おほみむちの命のみことも向來むかひの功績こうせきは。悉皆しつぱい造化さうぞうの自然しぜんなるにといはるるに成なるに。  
自己おのれの力ちからあらずに成なるに悟さとたまひくに。此三輪このさんりんの社やしろ今いまの御殿みどのに  
あらす。たら山やまお向むかひに拜奉かむりたまこと。如何いかなるに故ゆゑにあらしむに。崇神かうじん天皇てんかうの御世みよ  
に。おは齋孫さいそん大田おほの根子ねこといはるるに。三輪さんりん大神おほの祭礼まつりを司つかさどりし。高橋たかはし邑むらの人ひと  
活日けつひと大神おほの掌酒てのつまさとならす。神酒かみを舉あげる。神宮かみお宴まじりしに。といはるるに。  
天皇てんかうの御歌みうたに。三輪さんりんの殿とのに且戸またともと詠よせしといはるるに。且またお戸とを開ひらきして  
のこまひけるるに。長祿二年七月三輪ちやうろくの大神社おほの室内うち鳴なるによして。奉まつ







